

【A1・招待】

コミットメントの形成とモダリティの意味論的分析

田村早苗（北星学園大学）

日本語の終助詞やモーダル助動詞といったモダリティに関わる表現の分析では、談話参加者の「知識」や「信念」を基盤にした研究が多く行われてきた。これらは心理的な概念として位置付けられるものである。それに対して、言語使用や対話を「コミットメント」の形成として社会的概念に基づいて分析する提案もなされている（Gunlogson 2001, Geurts 2019, 三木 2019）。本発表では現代日本語のモダリティ表現「コトダ」を取り上げ、コミットメントの概念の言語分析における有用性を論じる。そのうえで、従来心理的な概念と結びつけて捉えられてきた談話管理理論（田窪・金水 1996 ほか）の枠組みをコミットメントに基づいて再解釈する可能性を探る。【文献】 Geurts, B. 2019. Communication as commitment sharing. Gunlogson, C. 2003. True to Form. 三木那由他 2019. 話し手の意味の心理性と公共性. 田窪行則・金水敏 1996. 複数の心的領域による談話管理.

【A2】

叙述類型を特徴づけるものの再検討—イベント項と外心構造による交差分類—

坂本 瑞生（東北大学大学院生）

日本語文法論では、叙述の類型として、出来事を表す事象叙述（「花子が言語学の本を読んだ」）と、ものの性質を表す属性叙述（「花子は大学生だ」）を区別してきた（益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版）。叙述類型は、①特定の時空間に位置づけられるか、②[対象表示部分+属性表示部分]という外心構造を持つか、という2つの観点から特徴づけられる。これまでの研究ではこの時間性と外心構造を必ずしも明確に区別してこなかった面があるが、両者が完全に一致するとは言い難い例が存在する。そこで、前者の時間性を文がイベント項を持つか否かと捉えた上で、本発表では「イベント項も外心構造も持つ文」と「イベント項も外心構造も持たない文」が存在することを指摘する。この事実を踏まえて、時間性と外心構造を文中の異なる構造的階層に位置づけて把握する可能性を示す。

【A3】

焦点化単数主語をともなう複数性動詞について

藏藤健雄 (立命館大学)

本発表では、「集まる」型の動詞の主語が、通常は複数解釈が得られる名詞でなければならぬにもかかわらず、焦点化子を伴う場合には単数解釈の名詞でも許される場合があることを指摘し(例:「アンも集まった」)形式意味論的分析を行う。通常「も」をふくむ文は、「元命題 prejacent が真であり、元命題とは異なる命題が真(=前提)である」場合に真となる。しかし、「アンも集まった」では、その元命題「アンが集まった」が、複数主語要件を満たしていないため、不適格な文であり、そのままでは真理条件が定義できない。そこで、元命題の真理に依存しない定義を提案する。具体的には、焦点化によって誘発される代替集合の要素のなかから適切なものが選ばれ、それに基づいて真理値が求められるという分析を提案する。

【A4】

南の階層構造に基づくモの周用的用法の考察を再考する

河本健汰(東京大学大学院生)・西畑宏紀(大阪大学大学院生)

榎原(2018)は、モの周用的用法を三つに分け、その分類がいわゆる南の階層構造において属する類の別や、とりたての焦点の在り方の違いと対応を持つことを主張している。本発表ではこの主張の妥当性について検討する。まず、C類要素とされるモが必ず焦点拡張を伴うという主張の妥当性を検討する。次に、モの各用法の類認定の基準設定の方法、および類認定の必要性についての批判的検討、および主張されている類認定の妥当性の検討を行う。さらに、C類要素とされるモの従属節での生起可能性と単文中での解釈可能性について統一的な説明を試みる。以上の議論を通して、ある用法のモが特定の従属節に生起しないという現象について、モの個別の用法への類の認定以外に説明の方途がありうることを提示する。【参考文献】榎原実香(2018)「文の階層構造からみたモの周用的用法の分類」『日本語文法』18-2, pp.110-126

【A5】

とりたて助詞モの意味の記述と新しい統語構造の提案

近藤幸知（九州大学大学院生）

とりたて助詞モを含む文には、多義的な解釈になりうるものがあり、例えば、「マイホームも建てた」という文は、(i)「独立して自分の美容室を建てて、隣にマイホームも建てた。」という意味にも、(ii)「子どもも生まれたし、マイホームも建てたし、頑張って働かなきゃ。」という意味にもなりうる。しかし、これらの意味を形式的に記述しようとする、後者の場合、「マイホームを建てたこと以外の出来事もある」という代替命題をどうやって作ればいいのかという問題が発生する。本発表では、後者の解釈になる場合のスコープを「～という出来事がある」という範囲まで広げ、文全体をフォーカスに設定できるような新しい統語構造を提案する。これにより、これら2つの解釈を同一のモで分析することができると主張する。

【B1】

**接続助詞ノニの情意的意味についての史的考察
—特にその定着段階について—**

赤尾莉央（南山大学大学院生）

逆接の接続助詞ノニはケドと異なり「違和感・意外感、不満」といった情意的逆接を表す。従来の研究では、情意的逆接を表すようになった経緯について、文中用法を中心とした議論がなされてきたが、本発表では文末に現れる終助詞的な用法を中心に考察を行う。

文末用法のノニは成立当初から一貫して情意の意味を表していた。この事実は、文末において情意的な意味がいち早く安定的に示されるようになり、それが文中で用いられる場合にも拡大したということを示唆する。文末で用いられる終助詞的なノニが繰り返し情意的意味を持って使われたことが、文中で使われる場合も含めたノニそのものに情意的意味が定着する一助になったと考えられる。

【B2・招待】

変体漢文における助動詞シム(令)の意味と機能

田中草大 (京都大学)

変体漢文における助動詞シム(令)の意味と機能について、特に非使役用法とされるもの(例：謹_レ令_レ拜見_レ候畢＝[書状ヲ]謹んで拜見せ_レ令_レめ_レ畢_レぬ)に注目して分類を行う。変体漢文における非使役のシムについては先行研究の蓄積があり、最新の研究ではこれを(助動詞としての意味を持つものではなく)漢字文における動詞マーカーとして機能しているとする。重要な意見であるが、それにより非使役の諸例を一律に解することは共時的・通時的に無理があると考えられる。本論では動詞マーカー説を承けつつ、改めて意味の観点も採り入れながら分類を試みる。具体的には、シムが動詞に対して肥大化語尾として働いた結果、「待遇」「強意」の意味・「語調の整え」「動詞マーカー」の機能を持ったと主張する。併せて、「被_レ焼／令_レ焼」のようにル・ラル(被)と互換性のあるシムの例が複数見られることを指摘し、使役の一類として非意志用法を持っていたと主張する。

【B3】

副詞「ずっと」の歴史的変遷—関連語との関わりから—

遠藤小春（関西大学大学院生）

本発表は、副詞「ずっと」の成立および意味の変遷を、歴史的に関連する語（「つと」「つっと」「ついと」「ずんと」「ずいと」）も含めて通時的調査から明らかにするものである。

まず、中古の「つと」で、2点が近距離にあることを表す【密着】（修飾する語＝ふたがる、添ふ等、以下同じ）から、その動作過程に注目して2点間の移動を表す【移行】（立つ、寄る等）が生まれた。中世後期には「つっと」で【移行】から2点間の大きな差に意識が向けられた【比較程度大】（かみ、涙もろひ等）と、2点の大きな空間的範囲に意識が向けられた【全範囲】（～まで等）に意味拡張した。「ずっと」は意味拡張後の「つっと」と関連性を持って現れた語であるため、初出にして「つっと」と同じ意味を持つ。近世では「ずっと」は【全範囲】の空間的な大きさから時間的な長さが類推されて【時間継続】（居る、待つ等）も表すようになった。いずれも距離の大きさをもとに意味拡張されたものである。

【B4】

中古・中世前期における連体節のテンス・アスペクト形式と事態の順序の関係

末吉勇貴（関西大学大学院生）

本発表は、中古・中世前期における連体節のテンス・アスペクト形式の選択と事態の順序の関係を、現代語の連体節との比較から明らかにする。現代語の連体節において主節時基準でのみ解釈できるのは発話時と主節事態の間に連体節事態がある時で且つテンス形式が「連体節ルー主節タ」または「連体節ター主節ル」の場合に限られる。そこで古典語の連体節において、発話時と主節事態の間に連体節事態があり、両節のテンス形式が異なっている例を調査したところ、そのような例は見られなかった。従って、古典語の連体節は発話時基準であるということを示す。さらに、中世前期に入ると「ムガタメニ」に接続する連体節において、主節時基準でのみ解釈できる例が現れるようになるということも明らかにする。また、アスペクト形式ツ・ヌ形は古典語の連体節においてテンス形式が用いられない際に、補助的なテンス形式として現れることがあるということについても指摘する。

【B5】

日本語諸方言の持続形式における待遇化の動機

鴨井修平（日本学術振興会特別研究員-PD）

持続形式の文法化は、TAM (Tense, Aspect, Mood)の階層構造に基づいており、通言語的に観察されている。例えば、中国語の持続形式「着」は、事実確認 (confirmative)を標示するムード形式に文法化している。日本語の持続形式「ヨル(-jor-)」は、西日本諸方言では、証拠性 (evidentiality)を標示するムード形式に文法化しており、近畿中央方言では、卑罵性 (pejorative)を標示する待遇形式に文法化している。アスペクトとの関係から見れば、持続形式からムード形式への文法化（ムード化）は順当であるが、持続形式から待遇形式への文法化（待遇化）は不可解である。つまり、日本語には、なぜ、ムード化に限らず待遇化が生じるのだろうかという個別言語的な問題がある。本研究では、日本諸方言の持続形式における待遇化は、形式の機能重複と形式のランキングという動機に基づいて生じるという仮説を提案する。また、日本語諸方言の持続形式における文法化が、ムード化と待遇化に分岐するという現象について考察する。

【C1】

新しい文法形式「まである」の意味と構文的特徴

中山健一（茨城キリスト教大学）

「まである」には、「会議が 10 時から 12 時までである」のように助詞「まで」と存在を表す動詞「ある」では解釈できないような使用例がある。たとえば「その店のラーメン、おいしすぎて、これまで食べたラーメンで一番おいしいまである」「ワンチャン（＝もしかすると）、そのチームが逆転優勝するまである」（いずれも、実例をもとにつくった作例）である。このような使用は 2020 年ころから広まっている。本発表では、SNS ツール「X（旧 Twitter）」から実例を収集・分析し、意味を支える「構文的特徴」、典型的な「構文的な型」をとりだし、明らかにすることによって、新しい文法形式「まである」の意味を明らかにする。結論として、「極端さ」と「可能性」の 2 つの意味、そして、「極端さ」の下位分類として「常識や一般的な感覚と逆の評価・判断としての極端さ」と「程度過剰としての極端さ」の 2 つの意味があることを述べる。

【C2】

「動詞＋シカナイ」の意味・用法について

米村雪乃（東京外国語大学大学院生）

本発表では、「食べるしかない」「行くしかなかった」のような、「動詞＋シカナイ」の意味・用法について発表する。これは「ダケダ」「シカナイ」「バカリダ」など、とりたて助詞が「ダ/ナイ」を伴って文末に現れる現象は寺村（1991）で「文末の取り立て」としてされているものの一つであり、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて調査を行った。まず形態面における特徴を指摘し、「意志性あり」と「意志性なし」という2種類の用法が存在することや、人称性によって意味に差が生まれることを確認した。また、最近よく見られる「おいしそうなドーナツ屋ができるんだって！行くしかないね！（作例）」のようなポジティブな意味を持つ例に関しても言及を行った。

参考文献：寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

【C3】

「不定語+デモ+ガ」はいつ使用されるか—叙述の型に着目して—

榎原実香（東京工業大学）

本研究の目的は、「不定語+デモ+ガ」の使用傾向を明らかにすることである。従来「デモ+ガ」のデータは、研究対象とされてこなかった。本発表では、鈴木（2022）の枠組みをもとに、コーパスから抽出した「不定語+デモ+ガ」の例を共起する述語ごとに分析し、「不定語+デモ+ガ」が属性叙述文に現れることを明らかにする。また、「不定語+デモ+ガ」が連体修飾節内や否定の文脈で使用される傾向から、TPに位置し、総称テンスと呼応することを明らかにする。さらに、「不定語+デモ+ガ」は1900年代に見られはじめ、近代語では「不定語+モ+ガ」と同じ様に事象叙述文として使用されていたことから、属性叙述文で用いられる傾向が時代を経て強まっていることを示す。「不定語+デモ+ガ」のガは、「不定語+デモ」の上昇を阻止し、TPにとどめていることを示唆する。

鈴木彩香（2022）『属性叙述と総称性』花鳥社

【C4・招待】

日琉諸語における主題標識の類型と格標識

中川奈津子（国立国語研究所）

本発表では、日本語東京方言、青森県南部方言、南琉球八重山語の主題標識をコーパス調査と聞き取り調査をもとに議論し、それぞれの言語の主題標識の形式・機能の違いと類似点を見る。

各方言での主題標識の現れる範囲は Prince (1981) の Given-New Taxonomy の階層に沿ってうまく説明できる。南部方言では主題標識の頻度が東京方言と比べて極端に低く、主題標識というよりは主題化や対比の用法で用いられていること、東京方言では圧倒的に主語のほうに主題標識が後続しやすいが、南琉球八重山語では目的語にも主語と同じぐらい後続しやすいことなどを、先行研究やコーパス調査をもとに概観する。また、主題標識の分布の違いにより、格標識の分布が異なることを議論する。

【C5】

発話内修復の分類
—『日本語話し言葉コーパス』を例に—

呉曉艷（東北大学大学院生）

話し言葉において、誤り等を修正したいときに、進行中の発話を一時的に中断して言い直して発話を再開すること修復と言うが、本発表では、修復を一発話内に行うものを「一発話内修復」と呼び、『日本語話し言葉コーパス』の「模擬講演」を対象として、それがどのような構造を持つかという視点から分類した。その結果、先行発話の不適切な内容の箇所で中断し、適切な言い方に置換することによって修復を行い、元の発話に戻るという(A)置換、発話の途中で不足すると考える情報を補足して付加したり、メタ的コメントを付加したりして元の発話に戻るという(B)付加、発話に不適切どころがあって先行発話を中断するが、不適切な部分はそのままだし、元の発話に戻らず、改めて仕切り直して発話を続けるという(C)仕切り直しという3種があることが明らかになった。そして、この3種はさらに下位分類でき、Aは5類、Bは2類、Cは2類に分けられる。

【D1】

**シナイの「未完了」における話し手の“想定”
—否定形式からみるスルの特性—**

道法 愛（広島大学大学院生）

日本語において、発話時における開始限界未達成、また終了限界未達成はシナイで表されるが、特定の条件下ではシナイがそのような意味解釈をもつ(本発表では、そのようなシナイを“シナイの「未完了」”と呼ぶ)。道法(2022)では、シナイが「未完了」を表すには、話し手が実現済みになっているという想定のもとで述べていることが重要だと指摘されている。本発表では、シナイが、実現済みになることへの“望ましさ”や実現済みになることを“確定視”するといった話し手の“想定”により「未完了」を表すことを、スルの特性と関連づけて考察し、スル及びシナイが、“望ましさ”や“確定視”という“話し手の事態への捉え方”によって、語用論的に「限界(未)達成」というアスペクト的意味を表すことを明らかにする。＜引用文献＞道法 愛(2022)「シナイが表す「未完了」について」『日本語学会2022年度春季大会発表予稿集』pp.7-12.

【D2】

動詞のル形とタ形で修飾される「ところ」の内容語的用法について

前田ゆかり（専修大学大学院研究生）

共時的な文法化研究では、内容語から機能語までの連続性や関連性がみられるとされている。しかし、「ところ」の多義性に関するこれまでの研究では「トコロ節」や「トコロダ文」など機能語の項目に偏り、場所や部分を示すような内容語に関する研究はごくわずかである。本発表では、コーパスの実例をもとに、節をとる場合の「ところ」の内容語的用法のなかでも動詞のル形とタ形を前接する例について調査した。具体的には「本が落ちたところ」「路地を入ったところ」「遊ぶところがない」「手の届くところに置かない」「自分の責任にしたところが親父らしい」といった用例を扱う。調査の結果、いくつかの修飾タイプがあり、それに相関する用法の違いがあることがわかった。時間的限定性（デキゴト性）や内・外の関係などに基づく判別方法、具体的な用例の分類について発表する。それにより、構文として示される形式名詞の意味を客観的に認定できることを示す。

【D3】

比喩を含む動詞由来複合語の位置付け

角出凱紀（京都大学大学院生）

本発表では、「サラミ出版」「キセル乗車」「スクラム開発」といった比喩的な解釈を含む動詞由来複合語を取り上げて、動詞由来複合語に「する」を伴うことができるか否かは先行研究（e.g. 伊藤・杉岡 2002; Yumoto 2010）で指摘されてきたような単一のパラメーターによって決まるものではなく、複数のパラメーターの組み合わせによって決まるものであることを主張する。

【参考文献】

Yumoto, Yoko. 2010. Variation in N-V compound verbs in Japanese. *Lingua* 120: 2388-2404.

伊藤たかね・杉岡洋子. 『語の仕組みと語形成』東京：研究社

【D4】

**連体助詞「の」の過剰使用と脱落に関する一考察
—固有名詞を中心に—**

孫之依（関西学院大学大学院生）

本発表は固有名詞を中心に、学習者の誤用例から「 N_1 の N_2 」及びそれに対応する「 N_1N_2 」という複合名詞が存在する「 N_1 （の） N_2 」を抽出し、両者の意味を互いに比較したうえで、誤用例における「の」の使用条件の一般化及び誤用メカニズムを明らかにした。その結果は以下のとおりである。①「日本」と「中国」のような固有名詞は、前接成分が後接成分の「所属」や「存在場所」などの意味をはじめ、それぞれの意味関係など、前接成分が後接成分との「関係づけ」を表す場合、「の」を使用する。一方、「所属」や「存在場所」などの「関係づけ」を表すことにより、前接成分が後接成分の内容を強調し、前後成分の意味関係が特定化されている場合、「の」を使用しない。②学習者の誤用メカニズムについて、学習者の言語処理ストラテジーが関与する可能性があると考えられる。

【D5】

**日本語学習者による主題の「は」の不使用の実態とその使用意識
—なぜ日本語学習者は主題を過度に省略するのか—**

中西久実子（京都外国語大学）

本発表では、日本語学習者が主題を使用すべきところで使用しない不使用の実態と学習者の使用意識を示す。そして、なぜ学習者が主題を使用すべきところで過度に省略するのか、その理由となる使用意識を明らかにする。

調査の結果、学習者による主題の不自然な省略には、既出のものを省略する場合と、未出のものを省略する場合とがあることがわかった。主題の不使用について、本発表では、学習者は、聞き手にわかってもらえそうな主題（読者がわかるだろうと書き手が思う主題）は省略してもよいと考えて省略をおこなっているという結論を導く。この主題の不使用は、韓国語以外の言語を母語とする学習者には日本語能力に関係なく、中級から上級レベルの学習者に観察されたことも示す。